実践報告

初学者に臨地のリアリティーをリアルに伝える実習の工夫
―コロナ禍における臨地実習教育 第２報―

鰺坂　由紀*・久留島　実姫*

Ⅰ．はじめに

2020年７月の生活行動援助論実習Ⅱでは、臨地での実習受け入れが難しく実習施設の縮小をせざるを得なくなり、そのような状況のなかで臨地実習、学内実習、リモート実習を取り入れたハイブリッド型実習を行なった。その経験を踏まえあらゆることを想定し、2021年１月に生活行動援助論実習Ⅰを実施した。本稿では、COVID-19下での生活行動援助論実習Ⅰの取り組みについて報告する。

Ⅱ．生活行動援助論実習Ⅰの実際

本実習は、１単位45時間の実習である。実習目的は、看護師に随伴し生活行動援助の実際に触れ、生活行動援助を行なう意義について考察することであり、患者及び利用者の療養環境や生活、生活行動援助のリアリティーに触れ、看護を学ぶ動機づけとなるよう位置づけている。本実習は昨年度まで、病棟のみの見学実習を週１日ずつ３週間かけて行なっていたが、今年度から地域包括ケアシステムの観点を踏まえ、病棟に加えて外来・施設を学生がローテーションして実習を行なう方法を計画していた。しかし、第３波の到来により臨地での実習が困難になり、複数の施設の看護部長および臨床指導者の協力を得て、患者の生活環境や生活行動援助の実際についてリモートで語っていただく方法に変更した。

臨地のリアリティーに直接触れることができなくなったことに際し、リモート実習において工夫したことは主に以下のことである。まず、可能な限りで写真や動画を活用しながら生活環境や生活行動援助について具体的に語っていただいた。そして、学生が講話を聴講し、５つのパラダイム－人間・健康・環境・生活・看護－の視点から思考できるよう、さらに、安全性・安楽性・自立性・自律性の側面から看護師の援助の意図を思考できるよう、つまり学生の思考の上り下りが働くように鑑みて、教員が臨地に赴き看護師と対話形式で講話を展開していく方法を取り入れた。さらに、学生が看護師の語りを意味づけていくことができるよう、講話後は学生及び教員とで共有するグループ別学習の時間を取り入れた。

Ⅲ．考察

2020年６月、厚生労働省及び文部科学省から、新型コロナウイルス感染症の影響により、臨地実習施設等の代替が難しい場合は、実習に代えて演習または学内実習により、学生の知識と技能の修得を図って差し支えないとの通知があった。どのようにすれば臨地実習と同等の学習成果を得られるのか、とりわけ本実習においてはどのようにすれば五感を活用して臨地のリアリ

*京都看護大学

表１　実習内容

月日	1/18（月）	1/19（火）	1/20（水）	1/21（木）	1/22（金）
内容	・実習オリエンテーション ・病院オリエンテーション（1 病院）	・講話 (1 病院 2 病棟) ・グループ別学習	・講話 (1 病院 1 病棟) ・グループ別学習	・講話 (2 施設) ・グループ別学習	・面談 ・まとめ

ティーを感じることができるのかと悩みは尽きなかった。しかし、学生にどのような学習成果があったのか、その評価はこれからであるが、学生から「看護の実際をしっかり視聴できて貴重であった」「臨地に行けなかった分、自分で想像する力がついたように感じた」などの声が聞かれ、対話形式による看護師の講話の聴講、その後の学生及び教員とのグループ別学習は、生の刺激と解釈の拡大・深化につながったと考える。

グループ別学習においては、生活行動援助論Ⅰ及び生活行動援助論演習Ⅰのなかで積極的にグループセッションを取り入れていたこともあり、本実習においても学生の能動的な活動が見受けられた。さらに、臨地実習オリエンテーションから実習記録の提出までのすべてがリモートでの説明となったが、学生は自ら行動をとることができており、これらのことから、今後も臨地実習を意識した学内での講義・演習の展開と自律性・主体性を育む教授－学習方法を検討していきたいと考える。

Ⅳ．今後に向けて

最後に、COVID-19 下での臨地実習を経験し、平常時からの臨地との実習目的・目標の共有、連携の重要性を再認識した。次年度も今年度同様に状況の変化が予測される。様々に変化する状況のなかでも学習成果を高められるよう、より一層、臨地と連携を図り創意工夫をしていきたいと考える。

文献

文部科学省初等中等教育局 , 他 .（2020）. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校 , 養成所及び養成施設等の対応について 2020 年 6 月 1 日 . https://www.mhlw.go.jp/.（閲覧日：2021 年 2 月 9 日）